倉吉市文化財調査報告書　第91集

鳥取大学附属図書館
郷土資料室

円谷城跡発掘調査報告書

平成８年度

倉吉市教育委員会

鳥取大学附属図書館
郷土資料室

序

この報告書は、円谷地区真砂土採取事業に伴う事前調査として、平成８年度に倉吉市円谷町城ノ谷・猪畑谷において実施した埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

近年、中・近世の遺跡の調査が各地で盛んになってきており、注目されております。文献資料の少ない中世においては、まだまだ不明確な部分が多く、今回調査いたしました円谷城も城の規模、構造についての記録がありませんでした。発掘調査の結果、その構造を明確にとらえる事ができ、15世紀（室町時代）に造られた山城であることがわかりました。

本報告書は発掘調査の記録としては不十分であり、満足いくものではありませんが、多くの方々に活用され郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後に、調査に際してご理解とご協力いただきましたオグラ建設株式会社ならびに地元の方々を始め、関係各機関および各位に対し、心から謝意を表する次第であります。

平成９年３月

倉吉市教育委員会
教育長　足　羽　一　昭

<10>0100572650

例　　言

1．本報告書は平成８年度に倉吉市教育委員会が、円谷地区真砂土採取事業に伴う事前調査として、倉吉市円谷町字城ノ谷（しろのたに）・猪畑谷（いのはただに）で実施した発掘調査の記録である。

2．発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長	足羽　一昭（倉吉市教育委員会教育長）	
調査委員	名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）	
	手嶋　義之（倉吉市文化財保護審議会委員）	
調　査　員	根鈴　輝雄（倉吉博物館学芸員）	眞田　廣幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）
	森下　哲哉（文化財係主任）	根鈴智津子（文化財係主事）
	加藤　誠司（文化財係主事）	岡本　智則（文化財係主事）
	岡平　拓也（文化財係主事）	
調査補助員	山根　雅美	
事　務　局	石田佐喜子（教育次長）	生田　淳美（文化課課長）
	福澤　昌子（文化財係主事）	山崎慎之介（文化財係主事）
	山下　博子（臨時職員）	
内務整理	泉　美智子・松田　恵子・世浪由美子・妻藤　君江・松嶋あつ子・青戸　千秋・竹歳　暁子	

3．現場での調査は岡本が担当した。遺構の図面整理は岡本が担当した。遺物実測は根鈴智・岡平・山根が担当した。遺物写真は岡本・加藤が担当し、松嶋・竹歳が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤・青戸が担当した。

4．本書の執筆は調査員が討議し、岡本が担当した。編集は松田が担当した。

5．遺構測量のための基準杭測量と調査後の地形測量を椿測量設計株式会社に委託した。空中撮影はスカイサービスに委託して、ラジコンヘリコプターで行った。

6．予備調査において検出した資料も本報告書に掲載した。

7．第１図（地形図）は、建設省国土地理院発行の１：25,000地形図「倉吉」「関金宿」「松崎」「三朝」の一部を縮小・加筆したものと、平成元年修正測量の１：2,500国土基本図　倉吉市平面図を使用した。

8．挿図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第Ⅴ座標系の北を示す。

9．遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

10．調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過……1
Ⅱ　位置と歴史的環境……1
Ⅲ　調査の概要……2
　1．遺　　構……2
　2．出土遺物……8
Ⅳ　ま　と　め……8
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　円谷城跡周辺の遺跡と調査区位置図……3
第2図　円谷城跡縄張図……5
第3図　西尾根支群遺構全体図……6
第4図　東尾根支群遺構全体図……7
第5図　西尾根支群・東尾根支群断面図……9
第6図　西尾根支群曲輪3下層遺構全体図、住居状遺構・段状遺構・土壙遺構図……11
第7図　円谷城跡出土遺物図……13
第8図　円谷城跡周辺の城館跡分布図……15

図　版　目　次

図版1　遺跡　円谷城跡空中写真　大原城跡より円谷城跡を望む　円谷城跡より北流する天神川を望む
　　円谷城跡より三朝を望む
図版2　遺構　西尾根支群全景　西尾根支群曲輪3・4　西尾根支群曲輪4、土橋　西尾根支群曲輪8
図版3　遺構　東尾根支群全景　東尾根支群曲輪1　東尾根支群曲輪1－㋒斜面　東尾根支群竪堀
図版4　遺構・遺物　住居状遺構　段状遺構　土壙　碁石
図版5　遺物　出土遺物

Ⅰ　発掘調査に至る経過

平成５（1993）年３月、オグラ建設株式会社より、倉吉市円谷町地内の山林に於いて円谷地区真砂土採取事業計画が示され、埋蔵文化財の有無が照会された。開発予定地は、以前に鳥取県教育委員会の行った踏査により、城跡と見られる平坦地、堀切、段が確認されていた。倉吉市教育委員会は現地を確認し、城跡の可能性が高いと判断した。このため、平成６（1994）年６月に予備調査を行い、曲輪・堀切・土橋などを確認し、室町時代に属する城跡と判断されるに至った。そこで遺跡の保存についてオグラ建設株式会社と協議を行ったが、開発側の希望等により、やむを得ず開発予定地の内、遺跡の存在する尾根部分を中心とした 4,800㎡について、原因者負担による発掘調査を実施する事となった。調査面積は、調査開始後に樹木伐採をしたところ、竪堀が新たに発見されたため見直しを図り、最終的には 7,800㎡の発掘調査をした。発掘調査は、倉吉市教育委員会が主体となり、平成８（1996）年７月15日～12月13日まで現地調査を実施した。

Ⅱ　位置と歴史的環境

円谷城跡は、倉吉市街地より東方に約３㎞離れた三朝町との境、天神川の支流である竹田川に沿った急峻な尾根上、倉吉市円谷町字城ノ谷・猪畑谷に位置する。円谷集落の南側に連なる山並みの頂部から北に延びる尾根と、この尾根のなかほどから東側に派生する尾根の先端部に所在し、水田面との比高差が最高所で約90mを測る。城跡の所在するところは、倉吉平野の南東の端にあたり、北流する天神川に対し東西から山塊が迫る地形である。また、美作に通じる竹田の谷（三朝町）の出入り口を抑える交通の要衝である。なお、城跡からの眺望はすぐれ倉吉平野の東側から日本海まで広く臨むことができるが、南側は竹田の谷の入り口しか見下ろせない。

円谷城跡の周辺は、隣接確認されている遺跡が非常に少ない。位置的に倉吉市の南端、三朝町との境に位置するため、三朝町の遺跡も含めて分布図範囲内の遺跡を中心に概要を述べる。

旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡はほとんど知られておらず、晩期の配石遺構・甕棺墓が出土した松ヶ坪遺跡（２）がある。

弥生時代は、僧ヶ平遺跡（５）、中期から集落が営まれた三朝町丸山遺跡(14)、竹田川の対岸の丘陵先端に所在する後期の裾ヶ谷墳丘墓（７）がある。

古墳時代では、円谷城跡周辺ではあまり知られていない。代表的なものとして、粘土槨を主体とした夔鳳鏡の出土した国分寺古墳（前方後方墳・全長60m）、三角縁神獣鏡・琴柱形石製品の出土した上神大将塚古墳（円墳・径30m）がある。後期の古墳は、沢ベリ遺跡、イザ原古墳群などの群集墳、また大宮古墳、家ノ後ロ１・２号墳、山際１号墳、向山６号墳（前方後円墳・全長40m）など横穴式石室を主体部とする古墳がある。７世紀以降は、切石を使用した横穴式石室をもつ三明寺古墳、福庭古墳がある。

奈良時代に入ると久米ヶ原丘陵の東端部周辺に伯耆国庁・伯耆国分寺・伯耆国分尼寺、大型建物群を検出し官衙跡と推定されている不入岡遺跡が近接して設けられ伯耆国の政治・文化の中心になる。その他古代地方寺院として、佐波理匙が出土した大御堂廃寺（１）、大原廃寺（８）、石塚廃寺がある。

平安時代以降の遺跡は、寺院跡として四王寺山山頂に四王寺跡、大日寺遺跡群、広瀬廃寺がある。城館跡は、天正７（1579）年吉川氏により岩倉城の押さえとして築かれた今倉城跡、山名時氏の守護所の可能性がある上養水遺跡（14～15世紀）、山名氏豊館跡推定地（15世紀）、今倉遺跡（15～16世紀）が調査されている。また、小鴨氏の居城岩倉城跡、円谷城跡の北西約３㎞離れた打吹山山頂に所在する伯耆守護大名山名氏の居城打吹城跡など

が知られている。この他に、江戸時代に著された『陰徳太平記』や『伯耆民談記』には上記二城のほかに、国府伯耆守親俊の居城高城城跡（唯落の城）、円谷城跡の北約3.5km離れて伯耆守護山名時氏の居城田内城跡、打吹城の出城と考えられている四十二丸城跡、小鴨氏の家臣岡田某氏の居城市場城跡、北ノ城、小土産山城跡などが記録に残る。この他、大原城跡（９）、上余戸郡山城跡、波々伎神社神職の舟越重敬の居城日下山城跡、和田城跡、和田東城跡、大谷城跡、赤岩山砦跡、家ノ後城跡、広瀬城跡、下福田城跡、三江城跡など踏査によって確認されている。倉吉における城館跡のほとんどは未調査であり、築城された時期や存続した時期が明確でないものが多く、各城跡の関連は明確でない。

参考文献

佐伯元吉編　「伯耆民談記」『因伯叢書』第２冊所収　名著出版　1972年

眞田廣幸　「倉吉の城館跡」『新編倉吉市史』第２巻中・近世編　1995年

Ⅲ　調査の概要

調査は、樹木伐採後、調査前地形測量を、平板によりＳ＝１／100、25cm毎の等高線で測量した。測量後、人力による表土除去作業を行い、遺構の掘り下げを行った。

遺構の測量は国土座標を使用し、遺物出土状況図についてはＳ＝１／10で、住居状遺構・土壙についてはＳ＝１／20で実測した。調査地の調査後地形測量は平板を使用し、Ｓ＝１／100、25cm毎の等高線で測量した。

１．遺　　構

調査の結果、山頂から北に延びる尾根と東に派生する尾根の先端部で、弥生時代と中世の遺構・遺物を検出した。

城跡に関する遺構は尾根上全域にわたって曲輪14・堀切２・竪堀２・土橋１を検出した。曲輪の配置は、山頂から北に延びる丘陵上と東に派生する丘陵先端部に分かれ、それぞれが群を成して配置される。このため、北に延びる丘陵を西尾根支群、東に派生する丘陵を東尾根支群と区別し、それぞれの支群ごとで遺構名を付けた。西尾根支群は、さらに調査区外である南側の尾根上に平坦面が連続し、また周辺の踏査の結果をふまえると、本来山頂から各尾根に、城に関する施設が拡がることが予想される。今回の調査区はその先端部分にあたるため、丘陵先端から山頂に向かうかたちで遺構名を付けた。また、東尾根支群の曲輪は、わずかな段差により構成されており五段で一セットと考え、大きく曲輪１としてまとめた。

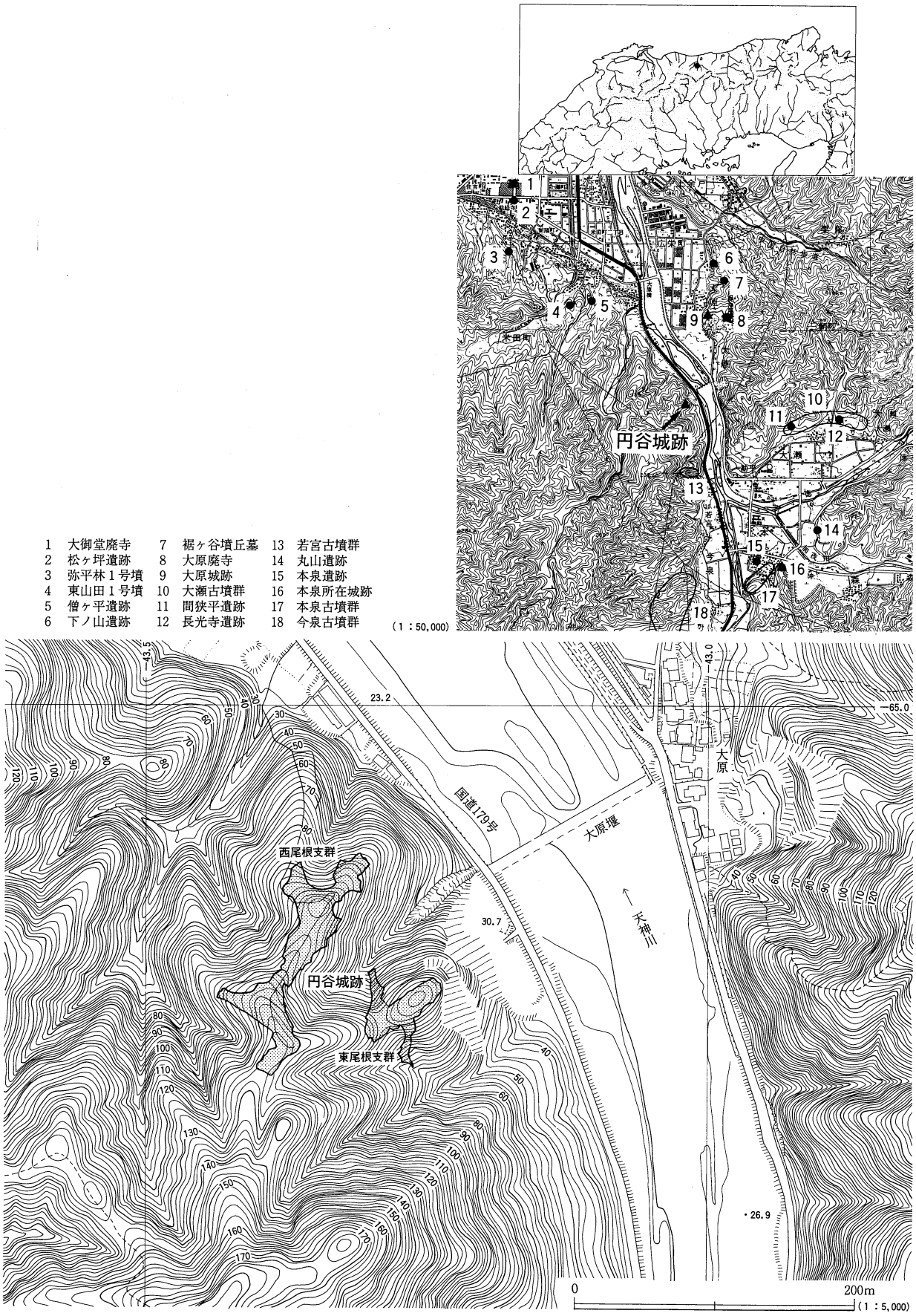
弥生時代後期の遺構は、住居状遺構１・段状遺構１・土壙１を検出した。

西尾根支群

総延長220mを測り、急激に下る斜面部分と平坦な部分とに区分される。この境には土橋が造られており、斜面部分には比較的小型の曲輪、平坦部分には比較的大型の曲輪が群を成し、全体的に内縁線・肩が不明瞭な曲輪で構成される。なお、曲輪６～８は重機による掘削のため著しい破壊を受けている。

曲輪１　面積約41m²、標高約96m。丘陵の先端部、曲輪３から東に延びる尾根上に位置する。内縁線は明瞭だが、肩は不明瞭で曲輪面も平滑でなく、ほぼ自然の地形。近接する曲輪３との比高差約９mを測る。

曲輪２　面積約40m²、標高約101m。曲輪１と対照的に、曲輪３から北にやや下って位置する。内縁線・肩ともに明瞭で、曲輪面も平滑である。曲輪面南西より土師質土器坏底部（１）が出土した。



第１図　円谷城跡周辺の遺跡と調査区位置図

曲輪３　面積約555㎡、標高約105m。今回の調査で検出した曲輪の中で最大規模のものである。西縁は後世の山道により削られ、東縁は自然の崩落により崩れる。残りの肩は明瞭、曲輪面は平滑である。北側約３分の１は築城当時凹地あるいは段をなしており、これを埋めるため橙褐色粘質土を約１mほどつき固めて平坦面を北側に拡張している。

曲輪４　面積約383㎡、標高約107m。曲輪３から南側に一段高く位置する。曲輪３に次いで２番目に大規模である。曲輪の中央尾根筋には後世の山道が走る。また東側半分は、後世の攪乱により削り取られる。曲輪３との比高差２mを測り連続する。

曲輪５　面積約63㎡、標高約112m。曲輪６より西に延びる尾根上に位置する。内縁線・肩ともに不明瞭で曲輪面も傾斜する。ほぼ自然の地形。

曲輪６　面積約140㎡、標高約119m。曲輪４に向かって尾根筋が北東方向に屈曲する位置にある。幅６mで東西方向に三日月状にめぐる。内縁線・肩ともに明瞭で、曲輪面も比較的平滑である。曲輪７との距離が近く、周囲をめぐる様な配置から曲輪７の補助的な役割としての腰曲輪の可能性がある。

曲輪７　面積約166㎡、標高約122m。馬蹄形を呈する。曲輪６の南側に隣接し、比高差３mを測る。内縁線・肩ともに明瞭で曲輪面も平滑である。曲輪面南西より土師質土器高台付椀底部（２）が出土した。

曲輪８　面積約374㎡、標高約127m。曲輪７の南側に隣接し、比高差５mを測り、曲輪群中最高所に位置する。内縁線・肩ともに明瞭で曲輪面も平滑である。

曲輪９　面積約44㎡、標高約125m。曲輪８の南側に隣接する。曲輪８との比高差１mを測る。内縁線および肩は明瞭だが曲輪面はやや傾斜する。曲輪はさらに南側調査区外に拡がる。曲輪面南東より土師質土器皿底部片（３）が出土した。

土橋　曲輪４の曲輪面が収束しながら、丘陵尾根筋を幅0.8～1.0m・長さ12mの規模で、曲輪６の北斜面に取りつく。土橋の両側は深さ約4.5m、傾斜角約30度の比較的急斜面を形成している。

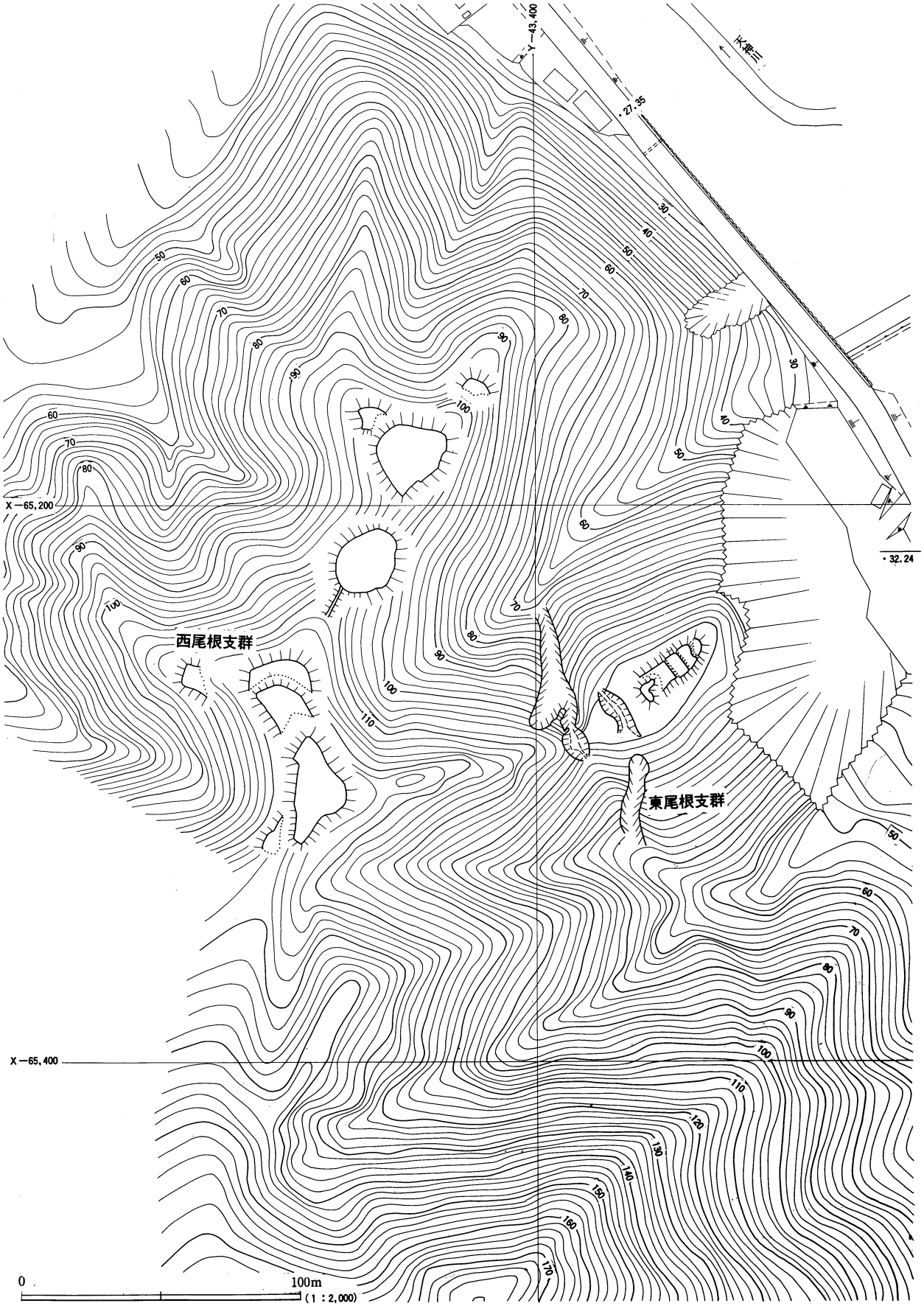
東尾根支群

総延長78mを測る。小規模で丁寧な曲輪が五段連続しており一つのまとまりが考えられる。さらにその背後には尾根の鞍部を利用した堀切を連続して二条設け、この堀切に連結した竪堀を二条設けている。曲輪については五段で一構成として考えられるのでまとめて曲輪１とし、１－㋑～㋩とした。

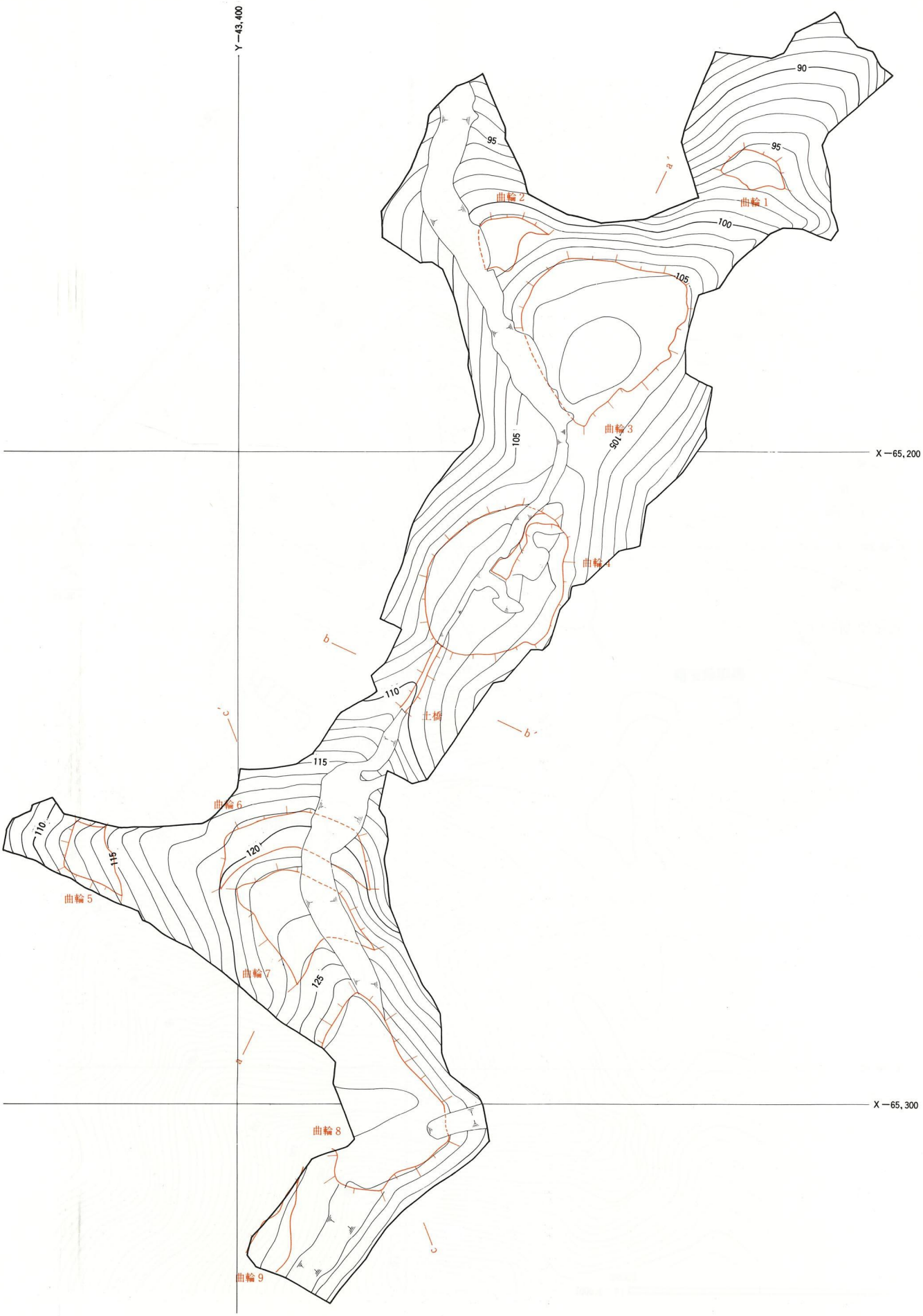
曲輪１－㋑　面積約22㎡、標高約109m。尾根の先端付近の最高所に位置する。肩は崩落し不明瞭だが曲輪面は比較的平滑である。尾根筋を主軸として凸型を呈する。この曲輪を最高所にし、先端にむかってさらに四段連続する。

曲輪１－㋺　面積約52㎡、標高約107.5m。曲輪㋑の東に接合し、段差約1.5mを測る。馬蹄形を呈す。内縁線はやや不明瞭だが、肩は比較的明瞭で、曲輪面は平滑で丁寧な造りである。南北の肩線は、尾根筋に沿って平行にのび、南北両隅でほぼ90度に角張る。曲輪㋩との境の南隅には50㎝大の石２個を滑り止めとしている。北側肩沿いにも50㎝大の石があり、滑り止めに使用されていたと考えられる。曲輪面より碁石と思われる小石１個が出土した。曲輪㋺との境界斜面北寄りで土師質土器坏（４）が出土した。

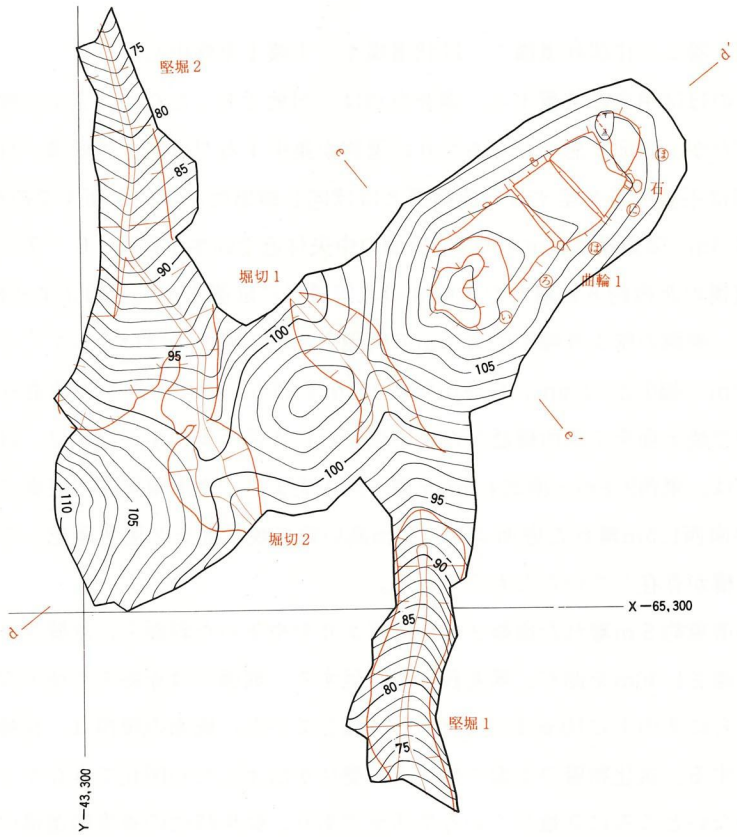
曲輪１－㋩　面積約39㎡、標高約106.5m。曲輪㋺の東に接合し、約0.9mほどの段差があるが歩くに不都合ない。曲輪㋺との境界を垂直気味に削り込む。内縁線・肩ともに明瞭で、曲輪面はほぼ長方形を呈し平滑である。北側肩沿いに50㎝大の石があり、曲輪㋺と同様滑り止めとして使用していたものと考えられる。曲輪面の曲輪に寄りで碁石と思われる小石５個が出土した。



第２図　円谷城跡縄張図



第3図　西尾根支群遺構全体図（1：400）



第４図　東尾根支群遺構全体図（1：400）

曲輪１－㋺　面積約35㎡、標高約106m。曲輪㋩の東に隣接し、段差約0.5mを測る。ほぼ長方形に近い形だが東縁は攪乱により崩れる。曲輪㋩との境界を垂直気味に削り込む。内縁線は明瞭、肩はやや不明瞭で、曲輪面はほぼ平滑である。曲輪㋭との境の南隅には50～80㎝大の石３個を滑り止めとしている。この下にも同様の石が数個点在しているが、崩落と同時にずり落ちたものと考えられる。

曲輪１－㋭　面積約14㎡、標高約105.5m。丘陵尾根の先端に位置する。曲輪㋺との段差約0.6mを測る。後世の攪乱により曲輪面が不明瞭で、丘陵先端に向かってなだらかに下る。東側肩は自然崩落。北側の曲輪㋺との境は電柱による攪乱により崩れる。先端部斜面で土師質土器坏底部片（５）が出土した。

堀切１　曲輪１－㋩西側の尾根筋中央寄り、上端間で幅６ｍ・深さ１ｍで掘られる。底幅約１ｍでほぼ平坦になる箱堀である。本来は尾根の鞍部を利用し、自然地形を生かした堀切であると推定される。南側はやや開き∩字形を呈し、堅堀１に連結される。木橋を渡した痕跡、逆茂木の痕跡などは検出できなかった。東側斜面には２ｍ大の岩が直立していたが、すぐ上にある曲輪１の南側には自然石が露呈しており、ここから落下してきたものと思われ、堅堀１に関連する追撃用の落下装置（石落し）ではない。

堅堀１　東に延びる尾根と、その南側の谷の間の斜面に位置し堀切１の南側に連結する。堀切１の南端から谷底まで平面長33m・幅６～８ｍ、深さ1.2～2.0mで掘られる。断面形はＶ字状を呈する。

堀切２　堀切１西側の尾根筋中央寄り、上端幅８ｍ・深さ２ｍで掘られる。底幅約３ｍの箱堀である。堀切１と同様本来は尾根の鞍部を利用していたと推定される。東斜面は30度、西斜面は40度の傾斜角をもつ。南北両端はすぼまり、北側の堅堀２に連結される。木橋を渡した痕跡、逆茂木の痕跡は確認できなかった。

堅堀２　東に延びる尾根と、その北側の谷の間の斜面に位置し堀切２の北側に連結する。堀切２の北端から谷底まで平面長42m・幅５～12m、深さ1.5～2.2mで掘られる。断面形はＵ字状を呈する。

弥生時代の遺構

西尾根支群曲輪３の下層より住居状遺構１・段状遺構１・土壙１を検出した。

住居状遺構　曲輪３のほぼ中央に位置する。調査当初は、凹地であったため、完全に埋没していない竪穴式住居と想定して掘り下げたが、床面と思われるあたりに遺物が集中するだけで、周壁溝・柱穴等の落ち込みは確認できなかった。平面形は不整円形を呈する。曲輪面とほぼ同じ検出面から、床面までの深さ約0.6mを測る。床面は南北3.5m・東西3.3m、床面積は９㎡を測る。床面の中央付近で弥生土器甕（６・７）がまとまって出土した。

段状遺構　住居状遺構の北西約８m離れた曲輪３の北側肩縁に位置する。曲輪３より約0.8mの深さで検出した。底面はほぼ平坦で、南側の壁より幅0.6～1.0mの間隔をあけて東西にほぼまっすぐに延びる溝を検出した。溝の規模は、長さ10.2m・幅0.2～0.6m、深さ0.05～0.2mを測る。溝の中央から西寄りでピット２個を検出した。また、溝より北側で焼土面を７箇所確認した。中央付近に４箇所集中するほかは、ほぼ溝と並行して東西に点在する。底面の規模は、東西9.8m・南北4.6mを測る。中央よりやや南東寄りの底面で砥石（Ｓ４）が出土した。また、段状遺構の南西1.5m離れた底面より約30cm高い面で焼土面を２箇所確認した。したがって、さらに別の住居ないし生活遺構が存在していたと考えられる。

土壙　住居状遺構の南東約５m離れた曲輪３の南側肩よりやや下った斜面上に位置する。規模は検出面で長軸1.94m・短軸1.30m、深さ1.30mを測り、隅丸長方形を呈する。底面には赤褐色の焼土混り土と暗灰色の灰が約20cm堆積しており、さらにその上に10cmほど炭化物が堆積していた。底面の規模は、長軸1.57m・短軸1.10mを測り、隅丸長方形を呈する。炭化物層の上面で弥生土器甕片が出土したが図化できなかった。

これらは、可耕地のないところに立地している生活址であり、弥生時代の軍事的遺構の可能性がある。

２．出土遺物

遺物は、旧石器時代から中世に至るものが出土したが、全体的に数量は少なく、遺構に伴うものは少なかった。城に関する遺物は少なく、土師質土器坏・皿・**椀**が数点、この時代に使用された碁石と思われる小石が数点確認された。弥生時代後期の甕が住居状遺構から出土し、周辺部からは刀子の可能性がある鉄片・敲石・凹石が出土した。また、西尾根支群の先端、曲輪３の北東隅のほぼ表土下で奈良時代（８世紀中頃）の須恵器坏・須恵器高台付坏が出土したが、遺構は確認されなかった。ほかに曲輪下部から剥片（黒曜石１・安山岩質５・水晶１）が出土したが時期は不明。以下、遺物観察の説明は、鉄製品・石製品を除き表に一括した。

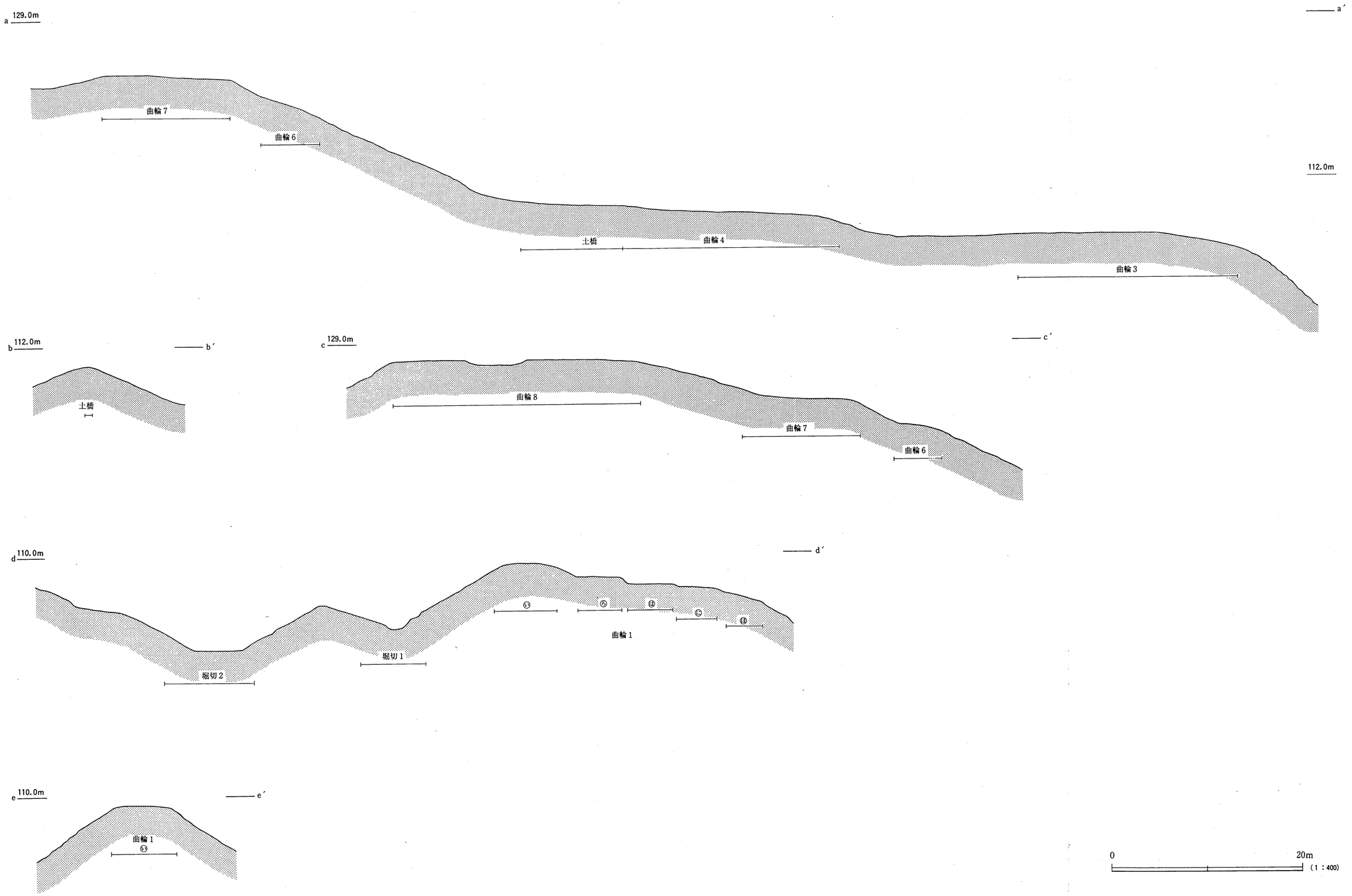
Ⅳ　ま　と　め

今回の調査では、尾根上全域にわたって城の施設を検出したが、崩落や重機による掘削を受け不明瞭な部分が目立った。また出土遺物がごく少量であったこと、城に関する記録がいっさい残っていないことなどから、不明瞭な部分が多い。しかし、全面を発掘調査する事によって、城の構造等を明らかにすることが出来た。以下、今回の調査によって得た知見を述べまとめとしたい。

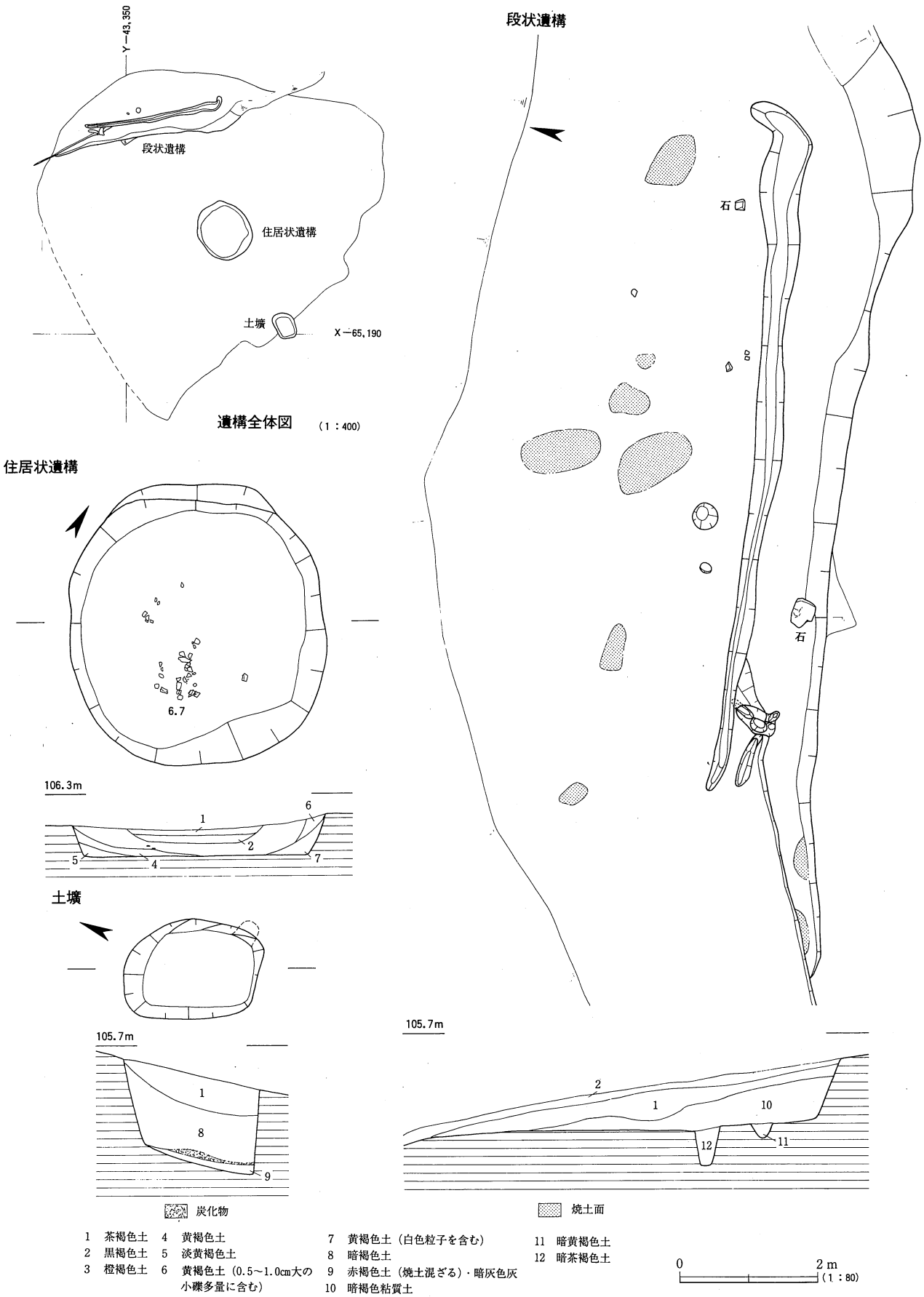
遺構・周辺踏査からみた城跡の年代観

発掘調査で明らかになったことを列挙し、往来の諸調査・研究を参考に年代観を整理しておきたい。

１．頂部の曲輪が粗雑：時間を経て肩部が崩落した可能性も十分にあり得るが、歩行に不都合でない程度の自然地形をそのままにしていると思われる。



第5図　西尾根支群・東尾根支群断面図

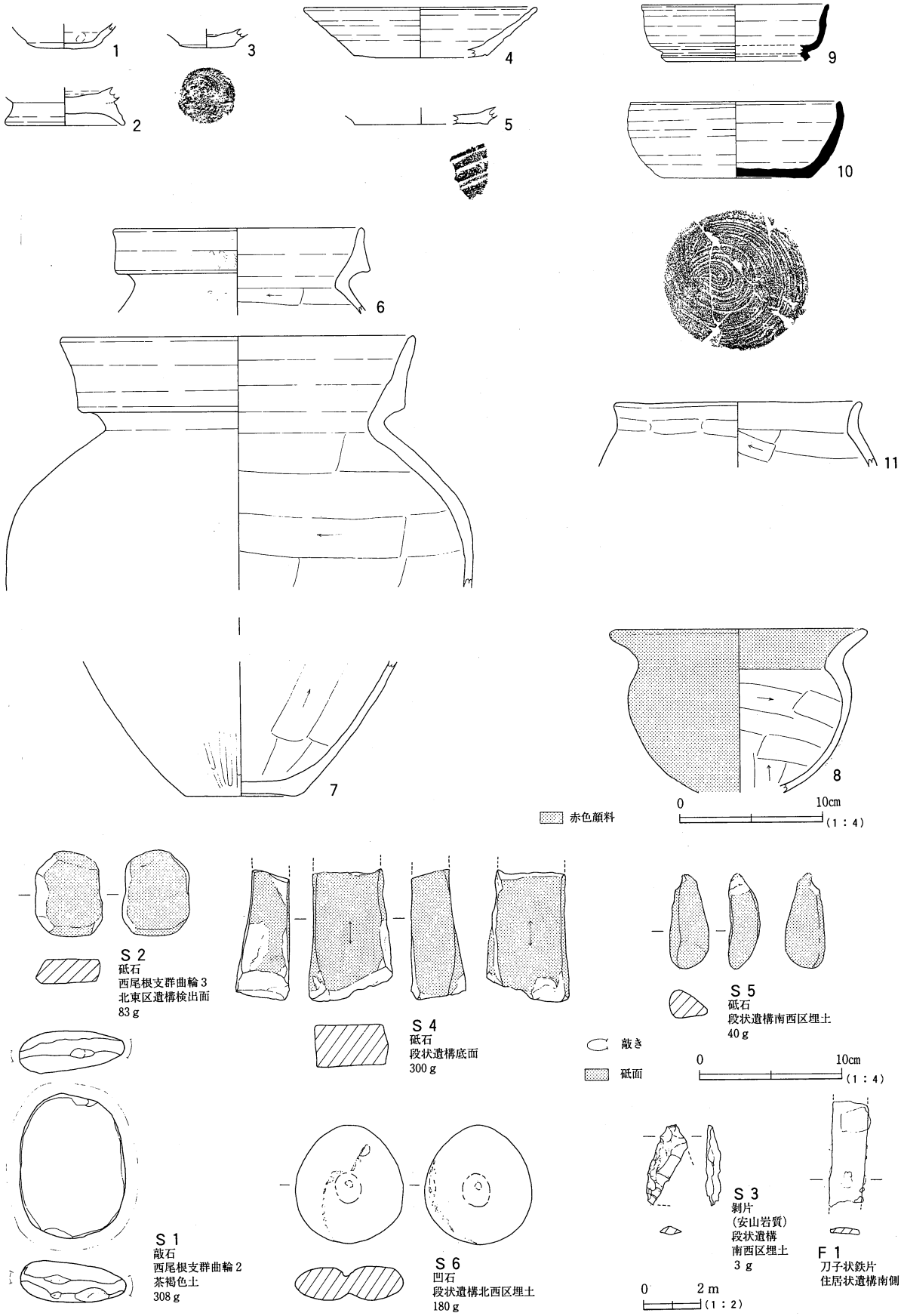


第６図　西尾根支群曲輪３下層遺構全体図、住居状遺構・段状遺構・土壙遺構図

土　器　観　察　表

〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No	器　種	法量(cm)	形　　態	手　　法	胎土　焼成　色調　遺存度
西尾根支群 曲輪2 南西区 茶褐色土	1	土師質 土　器 坏	底径　5.2	薄手。丸い底に大きく開く口縁がつく。	口縁部ヨコナデ。底部外面・内面ともナデ。	細砂粒を含む。 ややあまく摩滅。淡黄褐色。 底部1/4片。
西尾根支群 曲輪7 南西区	2	土師質 土　器 高台付 **塊**	脚径　8.0	厚手の底部。高台は断面三角形で高く開いて立つ。底部の切り離しはナデ調整のため不明。	底部外面ナデ。底部内面籾状の圧痕1個あり。	細砂粒を比較的多量に含む。 普通。外面淡褐色、内面灰褐色。 口縁部欠損。
西尾根支群 曲輪9 南東区	3	土師質 土　器 皿	底径　3.9	小さい底部から強く外反する口縁がつく。	回転糸切り底。	1～2㎜大の砂粒を比較的多量に含む。 普通。全体に摩滅。赤褐色。 口縁部欠損。
東尾根支群 曲輪1－㋺ 東斜面	4	土師質 土　器 坏	口径(16.0) 底径(9.4) 器高(3.5)	口縁部は直線的に大きく開く。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面深い板目。	精良。2㎜大の砂粒を少量含む。 普通。内面摩滅。淡白褐色。 口縁部1/5片。
東尾根支群 曲輪1－㋻ 東端表採	5		底径(9.2)		底部外面板目。	精良。細砂粒を多量に含む。 普通。淡黄灰色。 底部1/6片。
住居状遺構 床面 南西区埋土	6	弥　生 土　器 甕	口径(17.2)	口縁部は直立する二重口縁で、断面はねあげ口縁状を呈す。肩部外面櫛描波状文。	口縁部外面一部櫛描沈線残り、風化だけでなくヨコナデにより消しているものと思われる。肩部内面ヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒を多量に含む。 ややあまい。風化著しい。黄褐色。 口縁部完存。
	7	弥　生 土　器 大型甕	口径(24.5) 底径　7.6	口縁部は外反する二重口縁で、屈曲部は厚い。肩部櫛描波状文を認める。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面調整不明。底部外面ヘラミガキをわずかに残す。体部内面ヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒を比較的多量に含む。 ややあまい。風化著しい。淡黄褐色。 口縁～肩部1/2片、底部完存。
遺構外 （西尾根支群曲輪7）	8	弥　生 土　器 甕	口径 17.4 最大胴径 15.5	口縁部は強く外反するくの字口縁で厚い。体部は肩の張る半球形を呈す。	口縁部内外面横方向のヘラミガキのちナデ。体部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	3㎜以下の砂粒を多く含む。 普通。外面暗灰褐色、内面暗褐色。外面全面及び内面口縁部赤色顔料塗彩。外面濃く煤付着。 底部欠損。
（西尾根支群曲輪3 南西区遺構検出面・南東区茶褐色土）（段状遺構　埋土）	9	須恵器 高台付 坏	口径 12.9 器高　4.0	内湾する体部から口縁部を外反させて作る。口縁端部外面は凹む。高台は低く、わずかに外方へふんばる。底部の切り離しは不明。	口縁部内外面ヨコナデ。底部と体部の境界はケズリ痕を残す。	精良。1㎜大の砂粒を少量含む。 良好。外面暗青灰色、内面白灰色。 口縁～底部2/3片、底面欠損。
（西尾根支群曲輪8）	10	須恵器 坏	口径 14.6 底径　8.1 器高　5.4	口縁部は内湾し、内側に丸味をもつ。やや大型。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。底部内面多方向のナデ。	白色粒子を多量に含む。 普通。暗青灰色。 完形。
（西尾根支群曲輪2 西ベルト）	11	土師器 甕	口径(17.0)	口縁部は短く外反する。体部球形。	口縁部外面横方向のナデ。体部内面ヘラケズリ。	細砂粒を比較的多量に含む。 普通。淡茶褐色。外面煤付着。 口縁～肩部1/4片。



第7図　円谷城跡出土遺物図

2．粘質土を貼って曲輪肩部を補強している箇所がある：全ての曲輪は、地山削り出し法で平坦面を造っているが、西尾根支群先端に位置する曲輪３は、補強というよりはむしろ曲輪の面積を確保するために、凹地あるいは段を粘質土で埋めて平らにし曲輪面積を確保しているといえる。

3．曲輪群単位に役割分担がある：東尾根支群は曲輪を階段状に重ねている点で、戦闘（迎撃）に比重が置かれている。

4．虎口が不明瞭：肩部の甘さということも関連するが、通路と曲輪との接点が不明瞭である。

5．石（石垣）が使用されていない：一般に中世城砦は「土の城」と言われるが、土を叩き締めたり切岸を削り出しても、石は使用していない。東尾根支群の曲輪１－㋝・㋩・㋚でわずかにみられた50cm大の石が、貼り石状に滑り止めとして使用されていたが、曲輪肩部の隅のみであった。

6．堀切が掘られていない：東尾根支群では曲輪の背後に二条の堀切を設けるが、西尾根支群には認められない。

7．竪堀が掘られていない：東尾根支群では二条の堀切に伴って竪堀を設けるが、西尾根支群には認められない。

8．通路が不明瞭：西尾根支群では、後世の山道や重機による掘削で、尾根上を辿ると思われるメインストリートは、明瞭な通路の形として現われなかった。

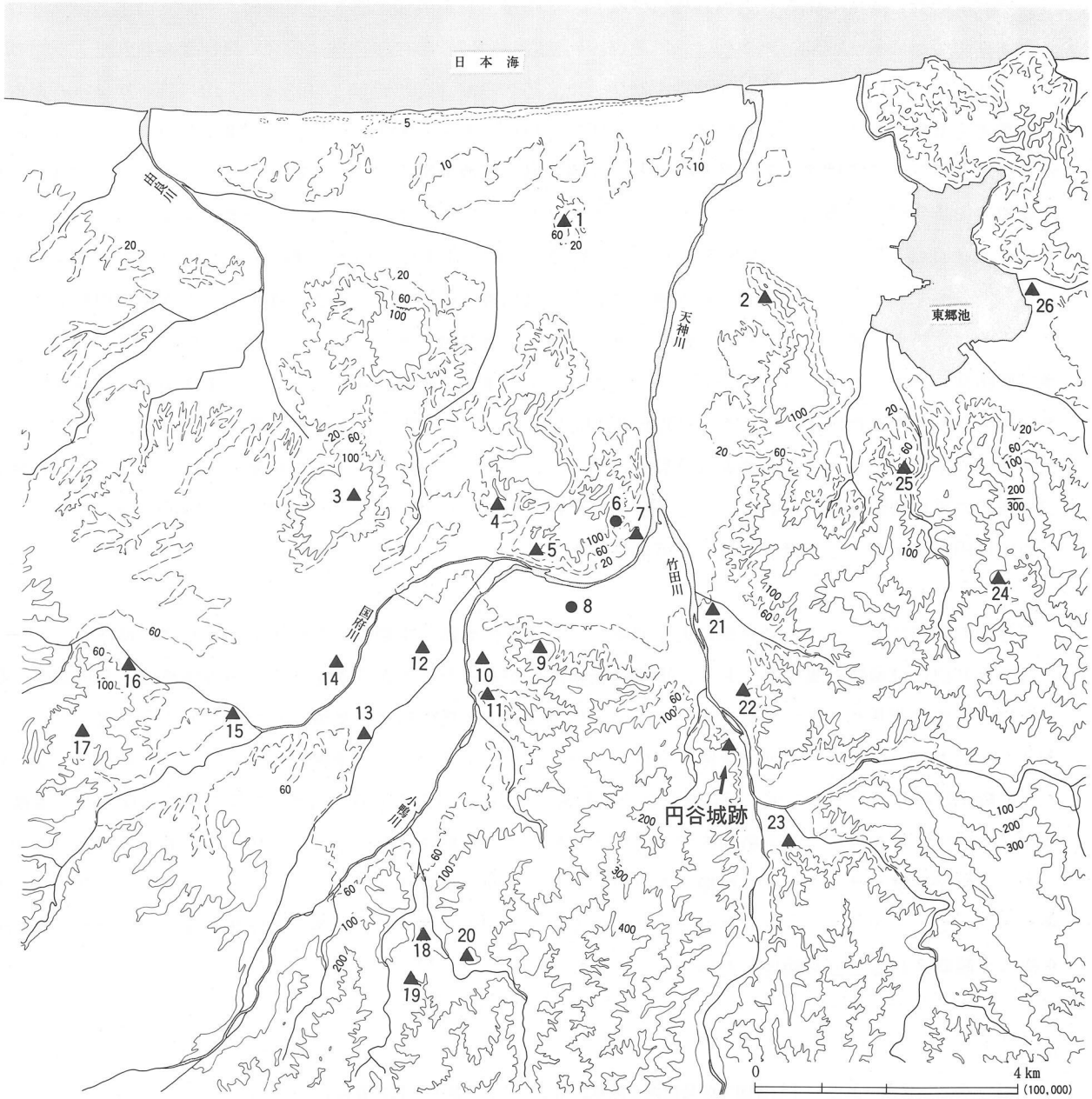
以上の観察事項から整理すると、１・４・６・７は南北朝期城砦の特徴としてしばしば取り上げられる点である。ところが、５のように石を込める技法や２は戦国期の城砦に見られる一般的な傾向である。少なくとも、畝状竪堀や石垣など、戦国期以降に見い出される施設は確実に築かれていない。

支群ごとで比較すると、西尾根支群はなだらかに続く尾根上に比較的距離を置きながら、自然地形をそのまま利用して曲輪を削りだしている。肩は不明瞭である。堀切、竪堀はない。これに比べ、東尾根支群は小型で端正な曲輪をほとんど段差なく五段配置しており、曲輪の背後には自然の鞍部を利用した深い堀切を二条設け尾根を切断している。さらに堀切に連結して二条の竪堀を設ける。非常に小規模だが、堅固な防御を実現しているといえる。城の構造からみると、西尾根支群より東尾根支群のほうがより後出的要素が認められる。

出土遺物からみた城跡の年代観

出土した遺物は、土師質土器が５点と少量であった。土師質土器は、回転糸切り底をもつ。倉吉において、回転糸切り底の土師質土器が出現するのは、伯耆国庁跡[註1)]の出土遺物より10世紀前半に位置づけられている。回転糸切り底を有する土師質土器の坏・皿類が出土している遺跡は、伯耆国庁以外に打塚遺跡[註2)]・大日寺遺跡群[註3)]・広瀬廃寺跡[註4)]・宮ノ下遺跡[註5)]・擲塚遺跡[註6)]・山名氏館跡推定地[註7)]・今倉遺跡[註8)]がある。打塚遺跡では、土壇状盛土内より回転糸切り底の皿・台付皿・坏が出土している。時期は11世紀に比定される。大日寺遺跡群では、回転糸切り底と静止糸切り底の坏・皿・台付皿・鉢・甕が出土している。時期は、打塚遺跡と同じ11世紀に比定される。宮ノ下遺跡では、土壙墓内より回転糸切り底の皿と底部ナデ調整の皿が、宋銭とともに出土している。時期は13世紀に比定されている。広瀬廃寺跡では、宮ノ下と同様な２種の皿が、蓮池の底より多量に出土している。時期は12～13世紀に比定されている。山名氏館跡推定地では、回転糸切り底をもつ坏・皿が出土している。時期は15世紀に比定される。今倉遺跡は、15世紀から16世紀にかけて営まれた集落跡であり、回転糸切り底の皿・坏類とヘラおこしの底部を有する皿・坏類が出土している。しかし、遺構に伴ったものはなく、良好な資料とは言えない。宮ノ下遺跡と広瀬廃寺跡から出土した皿は、法量・調整技法とも同一であり、形態にも差は見られない。

円谷城跡から出土した土師質土器坏は、回転糸切り底に板目痕跡が残る。土師質土器の出土した他の遺跡と、比較するには絶対数が少ないが、形態・手法が山名氏館跡推定地下層出土土師質土器坏に類似し、おおよそ15世紀代の時期に位置づけたい。



1 茶臼山城跡
2 日下山城跡
3 大谷城跡
4 和田城跡
5 和田東城跡
6 上養水遺跡
7 田内城跡
8 山名氏館跡推定地
9 打吹城跡
10 四十二丸城跡
11 赤岩山砦跡
12 北ノ城城跡
13 市場城跡
14 今倉城跡
15 三江城跡
16 下福田城跡
17 高城城跡
18 家ノ後城跡
19 広瀬城跡
20 岩倉城跡
21 上余戸郡山城跡
22 大原城跡
23 本泉所在城跡
24 羽衣石城跡
25 高野宮城跡
26 松崎城跡

第８図　円谷城跡周辺の城館跡分布図

伯耆守護山名一族と円谷城

建武政権の崩壊後、室町幕府のもと石橋和義に代わり山名時氏が伯耆国守護に任じられた。後に伯耆国を本拠に有力な守護大名として発展していく。山名時氏は、建武４（1337）年に田内城を築城し、隣接して守護所も併設している。その後、時氏の子山名師義が打吹城を築いて居城したという。築城年代は延文年間（1356～1361）以後大永４（1524）年に尼子経久が伯耆に侵攻するまで伯耆山名氏の居城であったと伝えられる。山名時氏は、

応安4（1371）年に死去し、その後師義が伯耆守護職を継承する。山名氏一族による伯耆守護職は、時氏に始まり、師義、時義、そして弟の氏之へと相伝された。その後、将軍義満の山名分裂策により同族の山名満幸が守護となるが、明徳の乱（明徳2年：1391）で敗れ、明徳3（1392）年に守護職は氏之に再び還補された。氏之は明徳・応永年中（1390～1429）伯耆守護職を歴任した。応仁の乱（応仁元年：1467）で、山名氏一族は室町幕府内での勢力を衰微させる。このころ伯耆では、文明12（1480）年から翌年にかけて、守護山名政之と同一族の元之が守護職を争うという同族内の内乱が起こり、法勝寺城（現西伯町）などで合戦があった。そして、守護方と反守護勢力の争乱は、伯耆国一円に拡大していった。文明13（1481）年9月5日付の山名政之から山名政豊にあてた書状によれば、「この中に、赤松氏が元之、一族の小太郎、南条など伯耆守護山名政之に対抗する諸家の背後にある」とある。このころ山名元之らが拠っていたのは伯耆国円山城で、元之の味方は「美作境竹田郡所々」に立てこもっていた。政之らはこれらの敵と合戦し、晦日には落城させている。この様に、竹田の谷においては軍事的緊張関係があったことは事実であろう。またこの折、播磨の赤松氏被官（家臣）の美作国人大河原氏は、山名元之・小太郎を美作国に引き入れ、同国奥津に城を構えて伯耆守護山名政之方に備えたという。この時期には、山名家内の争いがあり、伯耆の諸家は分裂・抗争していたようである。こうした情勢不安定のなかで、円谷城周辺地域での軍事的緊張関係があったことは歴史的背景のなかにもうかがえ、出土遺物の年代観と比較してみても、この頃に円谷城が砦として機能していた可能性がある。

円谷城の周辺には、竹田川の対岸に大原城跡・上余戸郡山城跡、南側の三朝町本泉に所在する城跡など、竹田の谷の入り口には城跡が集中しており、軍事的緊張関係があったことがうかがえる。円谷城跡は、発掘調査で得た資料、歴史的背景から考えておよそ15世紀頃、伯耆守護山名氏の時代に築城された城であると位置づけた。しかし、東伯耆においては、中世の遺跡の発掘調査例が非常に少なく、出土遺物も少ない。このため、中世土師質土器の編年は確立されておらず、不明確な部分が非常に多い。こうした状況のなか、今回の調査で検出した遺構・遺物について、現在確認しうる範囲内での資料と比較しての時期決定を行った。しかし、中世の城跡の調査例は少なく、表面観察だけでは全体を把握できないのだが、今回の調査では掘り下げることにより、より具体的に遺構をとらえることができたのは成果の一つといえよう。今回の調査で残した多くの問題・課題は、今後の調査例を待って解明されることを期待したい。

註

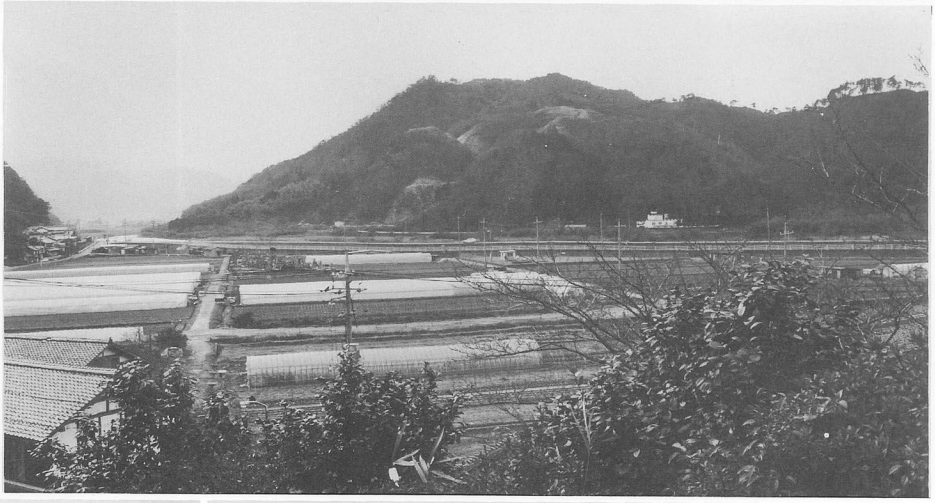
1．金子裕之・巽淳一郎他　『伯耆国庁跡発掘調査概報』第5・6次　倉吉市教育委員会　1979年
2．眞田廣幸　『打塚遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1984年
3．森下哲哉　『大日寺遺跡群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1992年
4．森下哲哉　『広瀬廃寺発掘調査概報』　倉吉市教育委員会　1979年
5．平方幸雄他　『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1977年
6．置田雅昭他　『擲塚遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1979年
7．竹宮亜也子　『山名氏館跡推定地発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1992年
8．眞田廣幸　『今倉城跡・今倉遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1982年

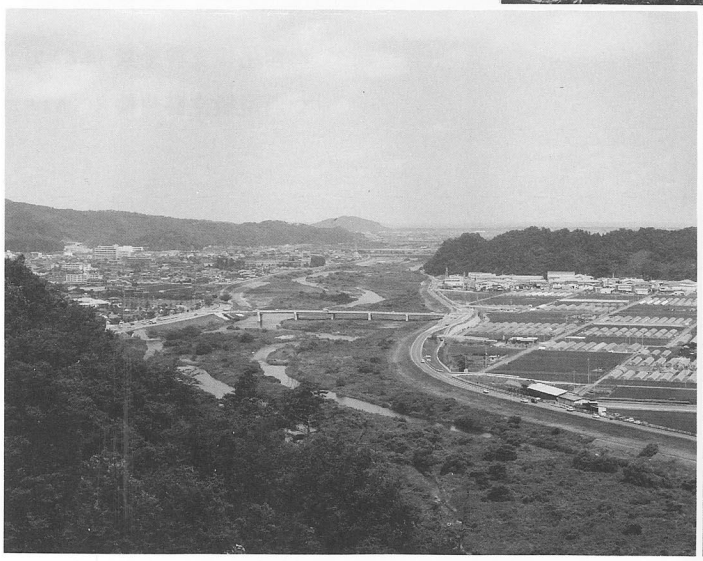
参考文献

日置粂左ヱ門　「伯耆守護山名時氏氏の活躍」「守護領国制の発展と山名氏」『新編倉吉市史』第2巻中・近世編　1995年
高橋正弘　『因伯の戦国城郭－通史編－』　1986年
徳永職男監修　『鳥取県の地名』（『日本歴史地名体系』32）　平凡社　1992年

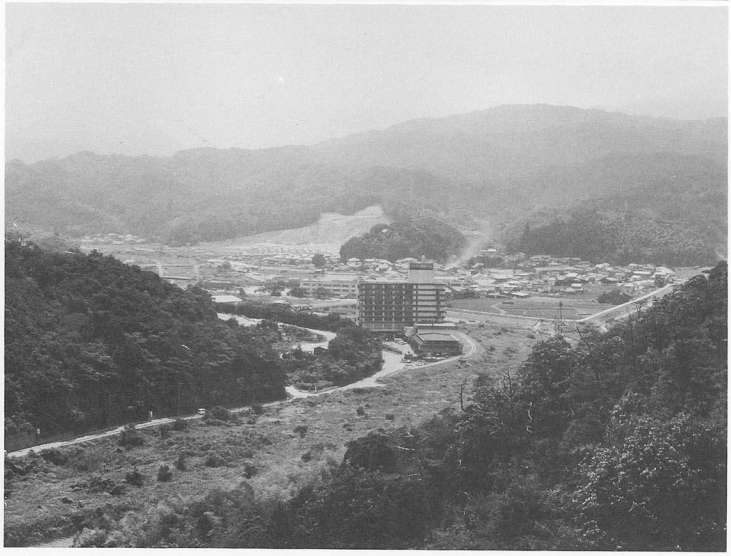
円谷城跡空中写真
（東より）

大原城跡より円谷城跡を望む
（北東より）



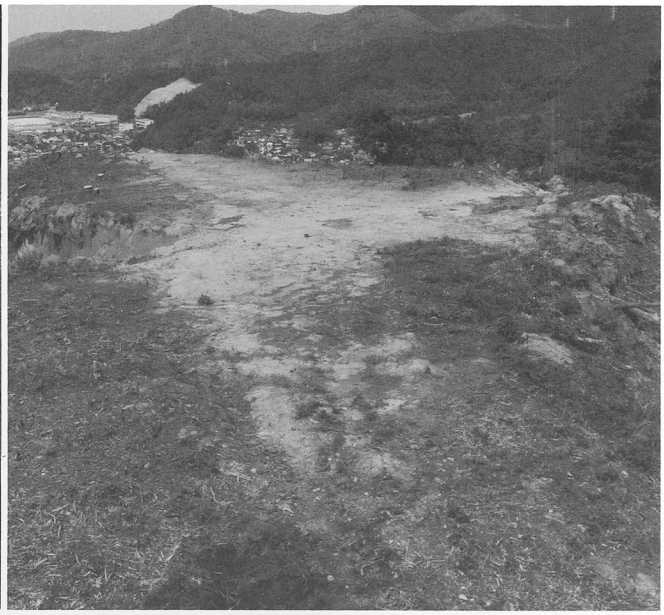


円谷城跡より北流する天神川を望む（南より）



円谷城跡より三朝を望む（北西より）

図版 2



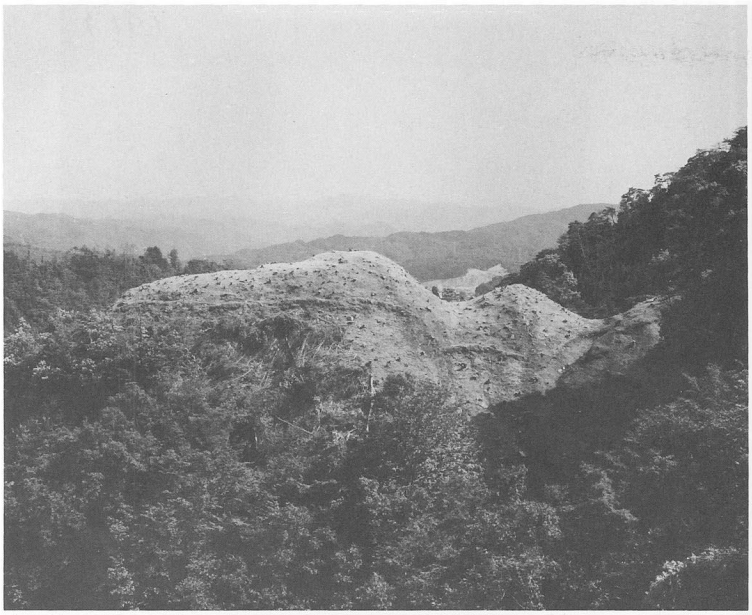
△西尾根支群全景（北東より）

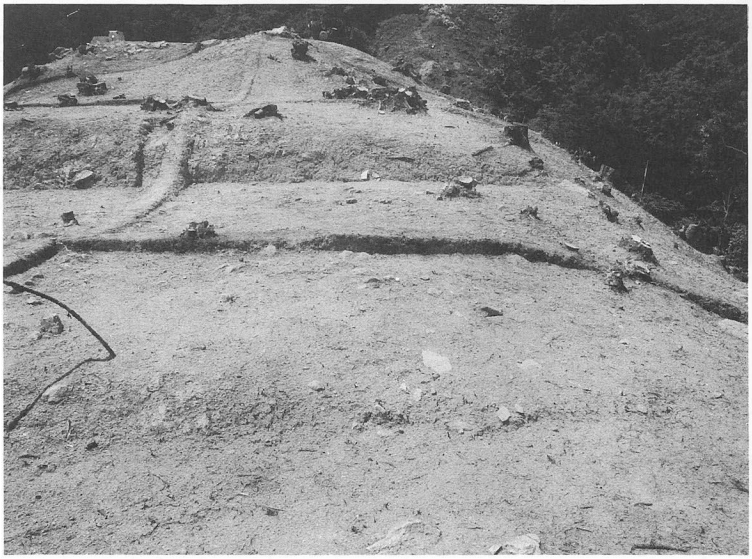
▽西尾根支群曲輪 8（南より）

△西尾根支群全景（南西より）

◁西尾根支群曲輪 3 ・ 4（南より）

▽西尾根支群曲輪 4 、土橋（北より）





△東尾根支群全景（北より）

▽東尾根支群曲輪 1（東より）

△東尾根支群全景（南東より）

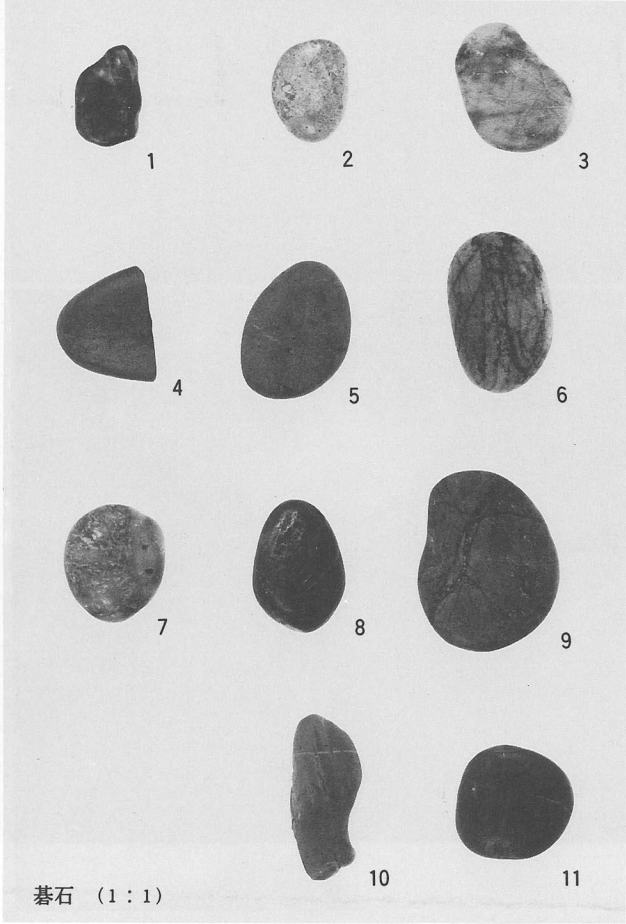
▷東尾根支群曲輪 1 －ろ斜面（南より）

▽東尾根支群竪堀 1（南より）

図版 4

◁住居状遺構（北より）　▷段状遺構（北西より）

▽土壙（北より）

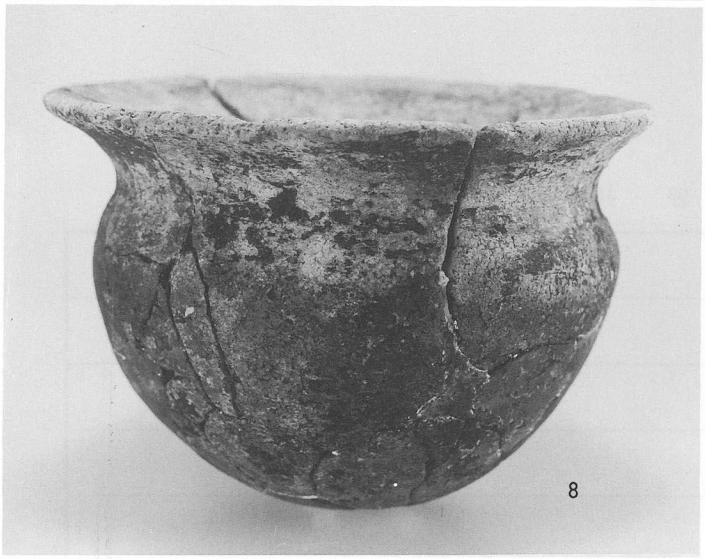


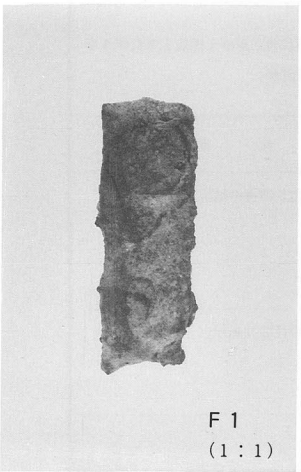
碁石　（1：1）

碁　石　計　測　表

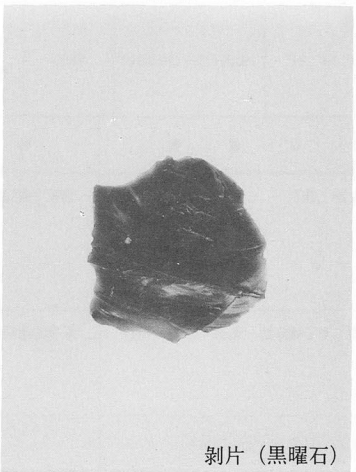
（g・cm）

No	出　土　位　置	重さ	長径	短径	厚さ	色
1	東尾根支群曲輪１－㋑西斜面	0.6	1.4	0.9	0.2	黒
2	東尾根支群曲輪１－㋑西斜面	1.02	1.4	1.0	0.4	白
3	東尾根支群曲輪１－㋑西斜面	1.66	1.8	1.4	0.4	白
4	東尾根支群曲輪１－㋩遺構検出面	1.5	－	1.6	0.5	灰
5	東尾根支群曲輪１－㋩遺構検出面	2.05	1.9	1.4	0.5	灰
6	東尾根支群曲輪１－㋩遺構検出面	3.16	2.1	1.4	0.6	白
7	東尾根支群曲輪１－㋣遺構検出面	1.6	1.6	1.4	0.5	白
8	東尾根支群曲輪１－㋣遺構検出面	2.38	1.8	1.3	0.7	黒
9	東尾根支群曲輪１－㋣遺構検出面	2.96	2.4	1.9	0.4	灰
10	東尾根支群曲輪１－㋩遺構検出面	1.25	2.1	1.0	0.4	灰
11	東尾根支群曲輪１－㋣遺構検出面	2.08	1.6	1.5	0.5	黒

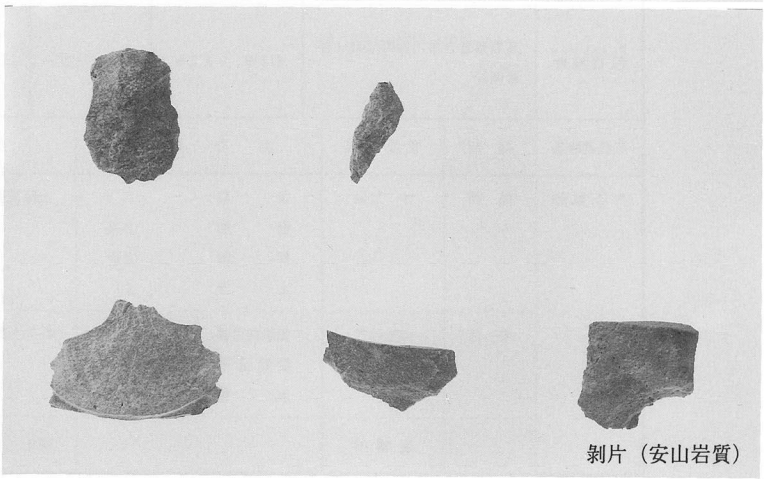




F 1
（1：1）



剥片（黒曜石）



剥片（安山岩質）

210.2
Kun
(91)
図書

報　告　書　抄　録

書　　名	円谷城跡発掘調査報告書
副 書 名	――――
巻　　次	――――
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第91集
編著者名	岡本智則
編集機関	倉吉市教育委員会
所 在 地	〒682　鳥取県倉吉市葵町722番地　TEL 0858－22－4419
発行年月日	西暦1997年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
円谷城跡	鳥取県倉吉市円谷町字城ノ谷 猪畑谷	31203：９ＸＥＥ	35°24′39″	133°51′21″	19960715～19970213	7800	円谷地区真砂土採取工事に伴う事前調査。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な時代	主な遺物	特記事項
円谷城跡	城跡	中世	曲輪　14 堀切　２条 竪堀　２条 土橋　1	土師質土器・碁石	伯耆守護山名氏関連の城跡。
	集落	弥生時代	住居状遺構　１棟 段状遺構　１基 土壙　１基	弥生土器・刃子状鉄片・砥石・敲石・凹石	軍事的遺構の可能性あり。
		遺構外		剥片（水晶・黒曜石・安山岩質）	

円谷城跡発掘調査報告書

平成９年３月31日　印刷

平成９年３月31日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会

印刷
製本　勝美印刷株式会社